



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	青木デボラ：アメリカの貧困観：政治経済学の目で見えた二つのシンボル
Author(s)	中澤, 香織; 青木, 紀
Citation	教育福祉研究, 0016, 77-84
Issue Date	2010-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46812
Type	departmental bulletin paper
File Information	Nakazawa.pdf



青木デボラ：アメリカの貧困観 —政治経済学の間で見た二つのシンボル—

中澤香織・青木紀(翻訳)

はじめに

この論文¹⁾において示される論点は、貧困を理解するためには、貧困に関する知識はおそらく社会的にそして歴史的に構築されるものだという事である。したがってまた、そのように批判的な目をもって、貧困(貧困層)と富(富裕層)に関する人びとの考えや態度、あるいはこれらの言葉の意味に関する理解が受けとめられ、評価されなければならない。理解は、現実の社会的構築を基盤とする社会的コンテクストによって変わり、影響を受ける。人びとが何を考え、その思考がどのように表現され、受けとめられ、誇張され、そして今もある貧困層に関する競合するイデオロギーの戦いの中で、どのように研ぎ澄まされた政治的武器に変わるかは、歴史的に社会的現実の一部分であった。この現実が、二つのイメージ、大恐慌時代の“Migrant Mother(移動労働者の母)”と1980年代の“Welfare Queen(福祉の女王)”を用いながら、徹底して考察される。すなわち、われわれの貧困に関する理解と知識は、政治的イデオロギーに基礎が置かれ、操作されていることを例証する。

貧困イデオロギーと人々が貧困についてどのように考えているかに関する学問的な検討あるいは一般的好奇心の欠如は、学問的「盲目」へと導き、研究者と「一般の人々」の見方の間の明らかな隔たりを生み出してきた。この理解のギャップに関する重要な認知はいまだないように思われ、それがアメリカや他の国においてもまた、「言葉やイメージの戦い」を含むイデオロギーのアリーナにおける負け戦の見地という意味で、進歩的な人び

とに対してコストを払い続けさせてきている²⁾。他の人も同様に論じているように(Lakoff 2004: 73; Frank 2004)、十分な事実を大衆に暴露すれば彼らは理性的な結論を下すだろうと仮定しながら、その事実を明らかにするだけでは、率直に言って不十分である(というのは、彼らは彼ら自身の個人的、経済的な利益の下に行動し、投票するだろうから)。この論文は、イメージとシンボル(象徴)、そしてそれらの歴史的・社会的構築物に関する文脈的な研究を通して、“政治経済学な目”から貧困の理解を再考する、最初の一步を主張するものである。

1. “Migrant Mother” から “Welfare Queen” へ：イデオロギーの戦争

イメージの創造を生み出す環境や諸条件を検討することは、特別なイメージ (icons) や知識がどのように生まれるかという、われわれの理解を豊かにする。それは「理解」(perceptions)の研究における不可欠な意味の表現と伝達に関わる社会的、文化的、政治的な諸層を含んでいる。この研究において選ばれた二つの例は、大変異なったイメージを表しているが、持続的に呼び起こさせる意味を伝える共通する力を共に持っている。それらの意味は政治的そしてイデオロギー的な目的にうまく利用された。

ドロシア・ラング (Dorothea Lange) によって、1936年カリフォルニア州のニポモで撮られた“Migrant Mother”の写実は、困窮した季節労働者(えんどう豆摘み)の苦悩を表し、大恐慌時代の象徴となった。図象化されたイメージがよく知られている一方で、その写真がなぜどのようにし

て生まれ、社会認識の核となったのかについては、よく理解されていない。“Migrant Mother”のイメージの背景と広がり進展は、歴史的・政治的な関心を表している。1933年3月のルーズベルト大統領の就任までに、鉄の生産は1896年のレベルにまで落ち込んでいた。農産物価格の暴落によって、抗議する農民たちは自らの家畜を殺し、新鮮な牛乳を捨て、穀物を燃料として燃やした。失業率は約25%に達し、5000に及ぶ銀行の倒産は900万の預金口座を無効にした。米國中の知事たちはバンクホリデーを宣言し、1930年、共和党は下院の議席数を失った。しかしながら、経済不況と結びついた政治の再編成を反映しながら、投票者の怒りが、国民の強力な統治力として作用し、共和党時代を終わらせたのは1932、1934、そして1936年であった。銀行システムの破綻に伴い、消費者の信頼はなくなり、経済は不況に入ったが、1890年代の初頭そして1900年代に入って以降の法人株式市場価値の上昇と下降は、アメリカのその後の経済的崩壊の指標であり、原因でもあった。これらの諸要因のすべてが、共和党を北部の田舎の小さい町や郊外に位置する少数派を基盤にした政党に変容させ、重工業と金融の責任を民主党の経済連合の推進力として引き継がせることになった(Phillips 2002: 68-69)。

社会状況は、産業時代の拘束から解かれたレッセフェールの個人主義と資本主義に対する代替として、19世紀後半のヨーロッパに現れたリベラリズムの隆盛によって影響を受けた(O'Connor 2001)。リベラルな視点において、いくつかのよく知られたイデオロギー上のコミットメントは明白であった。1) 国家は産業資本主義とそれに伴う富と貧困の集中の規制に関与しなければならないという深く保持された信念。2) 公共財を守ることの必要性の主張。1930年代のポピュリストによる運動は、新しいリベラルイデオロギー、たとえばヒューイ・ロング(Huey Long)と700万人の参加者がいたと主張する彼の“富を分け合う”クラブに反映されていた。政治的舞台上での派生的効果は大きかった。歴史家たちは、不公平な相続財

産と経済的力に関するFDR(フランクリン・デラノ・ルーズベルト)の1935年のスピーチを、これらの初期のポピュリストの草の根運動への応答としてしばしば引用してきた。1925年にはすでにアメリカの富は益々集中し始め、カースト制度めいた諸階層の形成へと導かれていた。それに加えて、1937年に出版された『アメリカの60家族』のフェルディナンド・ランドベルグ(Ferdinand Lundberg)のような著者たちによる本によって、アメリカは似たような(しかし60の家族よりも劣った)90の家族に支えられ、ほぼ60の裕福な家族によってコントロールされ、支配されていると告発されていた(Phillips 2002: 68-72)。このイデオロギー上の舞台は、“貧困に陥らないために貧困を考える”(de-paupérize thinking about poverty)といった進歩主義時代の環境の下で、すでに用意されていた。そこでは、貧困を個人のモラルや振る舞いの領域から取り出し、社会問題に変換することを含んでいた(O'Connor 2001: 1-22)。進歩主義者によるこの努力は、熱く議論が交わされていた諸問題の核心へと達し、それゆえ今のように、貧困と不平等の根本的原因に切り込むものであった。

これらの政治的、歴史的状況において、社会問題として貧困に取り組む好都合の時期がやってきた。これらの取り組みを支えるために、ルーズベルト政府は、農業労働者の間の貧困と社会的苦難を詳細に報道することを決定した。政治的な意味においては、ルーズベルト政府は公的に、援助プログラムやアメリカで起こっている経済危機を軽減するために、さまざまな政府活動が遂行されていることを宣伝したかったのである。これが、農業保障局(the Farm Security Administration)となる再定住局(the Resettlement Administration)のために、ラングが移動農業労働者の写真を撮影した理由だった。

ラングは、大恐慌による困難と貧困の象徴となったその写真の女性、フローレンス・オーエン・トンプソン(Florence Owens Thompson)との出会いについて、以下の個人的な体験を載せた。

私は飢えと絶望にある母親を見て、まるで磁石に引き寄せられたように近づいた。私の存在やカメラのことをどのように説明したかは覚えていないが、彼女が私に何も尋ねなかったことだけは覚えている。私は同じ方向からゆっくり近づきながら5枚の写真を撮った。私は彼女の名前や経歴を尋ねなかった。彼女は32歳だと語った。彼女と子どもたちは、周囲の畑にあった凍った野菜や子どもたちが捕ってきた鳥を食べて生きていたと言った。彼女はちょうど、食べ物を買うために車のタイヤを売ったところだった。7人の子どもが彼女の周りに寄り集まって挿し掛け屋根のテントの中に座っていた。彼女は私の写真が彼女の助けになるかもしれない、そのことが私を助けることになるかもしれない、とわかっているように思われた。そこには一種の同等の立場があった³⁾。

結果として写真は、あるイメージを呼び起こす、もっとも「忘れられない大恐慌のシンボル(象徴)」⁴⁾とたびたび呼ばれ、写真と写真家ドロシア・ラングを有名にした。その写真はアメリカ国民に不平等、困窮、無力を象徴的に語りかけた。時間的・空間的な脈絡に置かれたこの写真は、共有された人間の経験と感情移入に訴えるために使われた。伝えられたイメージは、想像できないほどの富の陰にあって、圧倒的な貧困に直面し、苦悩しているそれだった。政治的観点からすれば、経済復興のために政府と公共就労プログラムによる完全雇用を重要視し、1930年代を通して福祉国家の試験的開始を促進し、AFDC (Aid to Families with Dependent Children) を創った⁵⁾ ルーズベルト政権にとっては、「Migrant Mother」はきわめて効果的なシンボルであった。しかしながら、すぐにマスコミで圧倒的に評判になった写真は、フローレンス・O・トンプソンの経済的問題を緩和することもなく、また彼女の家計が不安定な農業季節労働に従事している現状を解決することもなかった⁶⁾。

公的な社会プログラムの政府によるサポート

は、貧困と不平等は道徳的行為の結果である、放任された自由市場の規制なき強欲さは政府のコントロールによって規制されなければならない、この二つの考え方に立つ学者とイデオログの間の出発点を象徴している。1930年代には、政治的に不平等の焦点が社会的・構造的要因のなかに位置づけられていた。しかしながら、貧困に対する対応は不平等の経済的影響だけでなく、文化的・社会的方法にも関心はおかれていた。学者たちは進歩主義的な政治経済の視点から打開する方法としてだけでなく、階級の問題、規制されない自由放任資本主義と個人主義の危険性、そして同様に社会改良の絶対的な必要性をハイライトさせる方法として、コミュニティの研究に興味を持つようになっていた (O' Conner 2001: 55)。

およそ50年後、1960年代と1970年代早期に始まった収益性低下という企業危機は、民営化というネオリベラル政策、そして福祉プログラム、ヘルスケア、教育、ニューディール政策や「貧困との戦い」(the War on Poverty)に関連する他の公的扶助の後退へと帰結した (Maskovsky 2001: 479)。注意深く操作されたトレンドな用語、たとえば「無駄の多い大きな政府」「競争」「効率」そしてその他の市場をベースとしたレトリックが、公共財よりも露骨に企業利益を優先する経済再生の私企業部門モデルの支持の中で沸き起こってきた。福祉、犯罪の増加、認知された裁判による許可 (perceived judicial permissiveness)、そしてスラムの暴動に対する反動の上にあった1980年代、中間階級の不安と市場原理、社会の再生の津波によって、ロナルド・レーガンが大統領の地位に就いた。1960年、福祉は人びとを動物に変容させると主張したゴールドウォーターのような保守派によって、政治的舞台は早くにも設定されており、後にはニクソンが、あまりに気前の良い福祉システムは女性に賃金労働を拒否させ、怠けて依存した生活を送らせるになると主張しながら、福祉カードをもてあそんだ (Francis Fox Piven 2001: 142-143)。同時期、企業利益のための絶え間ない衝動は、政治的キャンペーンを操作するため

の基金に飢えていた政治家に都合の良いパートナーシップを見つけ、企業福祉は成長し続けた。

しかしながら、“Welfare Cadillac (福祉のキャデラック)”を運転する“Welfare Queen”の物語をでっち上げたのはレーガンであった。彼はシカゴの welfare queen のケース—80 の別名、30 の住所、いくつもの社会保障番号、4 人の架空の亡夫を使って政府から 15 万ドルを盗んだとされる—を引き合いに出した。国民の怒りはたきつけられ、レーガンは憤然と中流の増大する怒り（特に白人の怒り）に応じ、福祉をカットすることを約束した。ジャーナリストたちがこの福祉の悪用物語の真相をむなしく調べようとしていた間に、国民は進行中のセービングスアンドローン・スキャンダル (Savings and Loan Scandals) と膨れ上がった企業福祉から目をそらされ⁷⁾、階級的(取り込み)戦争 (Class Warfare) におけるレーガンの努力はうまく成功した。同時に、正直に税を払っている人々が苦勞して稼いだお金を盗み、怠けて不道徳で不純な性行為に関わっていると描写され、典型的な「援助に値しない貧困」とされた女性たちへの嫌悪の感情が煽られていった。これらすべての意味合いは、“Welfare Queen”という言葉の構築の中に包み込まれた。言葉にはされないが、はっきりと人種的ニュアンスが付け加えられた。この戦略は welfare queens を性的に奔放な女性であり、不適切な母親であると強調し、階級や人種そして家父長制度のイデオロギーの奇妙な混合を説明しながら、その貧しさと伝統的にそぐわない女性世帯主であることを非難していた (Mullings 2001: 45)。

The welfare queen のイメージは、休みなく続くメディアやシンクタンクの偏った解釈によって意味が構築され、認知の枠組みとなり、スピンし、大きく無駄の多い政府、性的に奔放で制御不能な女性、福祉に頼っている女性（特にアフリカ系アメリカ人の女性）、そして政府の一般的な社会プログラムによる「補助金」に対する有無を言わせない批判を象徴するものとなった。すでに議論され

ているように、このメッセージの構築、その枠組みと政治的武器としての利用はひどく成功を収め、「福祉に依存した大家族の母親、何回も妊娠する母親たちが、性的に奔放で怠け者の貧困層というイメージとして描かれ、それらは反動的な政治家たちが行なったすべての努力よりももっと、反貧困に対する戦いを妨害するものとなった」(Harrington 1984; Mullings 2001)。このイメージは、アメリカ中に共鳴した。国民だれもがその言葉が何を意味するかを知り、welfare queens は福祉名簿から削り取られるべきだとなった。福祉に頼っている女性たちの実際の状況に関する事実、彼らが受け取る些細な公的クーポン、福祉プログラムが連邦予算に占めるのはほんの数パーセントにすぎないこと、多くの学者たちによって示された貧困と困難に関する本当の話と統計も、アメリカの多数派の人々の福祉に関する認識を決して変えることはなかった。この状況は、1996 年クリントン大統領の下の「われわれが知っている福祉の終わり」で最高潮に達した。

2. スピンするイメージと像 (icons) : 貧困知識の劇場

言葉は社会的現実に対するわれわれの指針であるとこれまで主張されてきた (Sapir 1929)。そして過去 50 年に渡って、急進的右派の保守党は、シンクタンク、ラジオのトーク番組、メディアに投資し、言論を振るう人々に繋ぎ、その社会的現実を変化させてきた。彼らはイデオロギーのアリーナをコントロールするため、うまく枠組み(われわれが世界をどのように見るかを形作る認知の構造)を創ってきた (Lakoff 2004)。長い期間に及ぶ、間断のない福祉への反対キャンペーンは、まるで、「多数のアメリカ人の福祉に関する考え方、それどころか福祉を受ける側の福祉に関する考え方さえも変化させた劇場」(Piven 2001: 144) のようであった。イデオロギーの戦いのなかで、大恐慌時代の the Migrant Mother の像とレーガン時代の the Welfare Queen は、一見したところでは共通したものはほとんどないように思われる。し

かしながら、より注意深い分析がこの二つのもっともらしいイメージの間の関連性を明らかにする。

両方のイメージは、混乱する社会状況のなかで、アメリカ人の感情を煽り、それぞれの目指すところへの支持を操作するために、政党とイデオログによって利用された。これらの「観念の商人 (merchants of ideas)」(Berger and Luckmann 1966) は、日常生活のなかのアリーナで、言葉やイデオロギーのメッセージを通じてアイデアを販売し、次々と認知に入り込み、そして理解を形作ってきた。理解 (perceptions) はかくして、思考と行動によって生じ、それらの思考と行動によって現実として維持され、その首尾一貫した世界のなかで、主観的な意味を持って人びとによって解釈されている。この意味付与の毎日の生活のなかで、社会における生活の境界を表すために言葉の力が意味を持ってくる。「私の家、私が仕事に乗っていく車、私が参加している人的ネットワーク、それらは私と他者が間主観性という手段のなかで共有している一つの世界にある」(Crossley 1996)。われわれは、われわれ自身の「思考の世界」を有し、それらを持ち歩き、それがわれわれ固有のマクロコズム (宇宙) を総合的に理解し、解釈することにおいて、われわれが測り、評価するように機能し、われわれを助けてくれる (Whorf 1941)。かくして、言葉は長い間、莫大な量の意味を反映しながら、社会のもっとも重要な象徴システムとして示され、世代から世代へと伝えられてきた。どのように認識がなされ、送られるかを確かめるためには、言語は日常生活で使用される経験と意味を理解するための決定的で不可欠な要素である。

われわれは生活の全体を通して、記号と象徴と意味表象であふれた世界に存在している。グループや諸個人において共有されつつ、また異なって所有されている日常生活の知識を含めた意味の貯蔵庫は、言語を通してどのように活性化されるのだろうか。よりはっきりと言えば、人々はどのようにして特定のイデオロギー世界の見解にたどり着き、引き込まれるのだろうか。「Migrant

Mother」と「Welfare Queen」のイメージの検討において、これらのシンボルはどのようにわれわれの共感という最深層の感情と他方での嫌悪のそれに入り込んだのであろうか。

メタファーとして言えば、両方のイメージは、世論と政治的扇動の舞台において演じられているジェンダーと階級と人種の枠組みを通して、一般国民の不安と心配につながっていた。子ども連れの移動労働者の象徴的表現形式においては「よき母親」、そして必死で働いているがしかし貧しいことが、ジェンダーと階級という集合的知識貯蔵庫を呼び覚ましていた。そのシンボルはわれわれの共感を活性化し、彼女に手を差し伸べ、支えたいという気持ちを持った感応を刺激するのである。

しかしすでに述べたように、この写真は実際には投票者にアピールし、ニューディール政策の一部としての社会プログラムの必要性を伝えるための、一貫した戦略の一部であった。こうしてわれわれは、観念の劇場のなかの象徴的支配の一部として、この写真を位置づけることができる。ここでは、いくつかのイメージは他のものより高く評価され、より多くの権威をもたらしことになる。そのような観念とイメージは、特定のグループの利益に奉仕するために操作されうる。すなわち、他者に受け入れさせ、その世界の特定の表象に従わせる力は、この支配のパワフルな面となる (Gal 2001: 424)。それは、この政治的対立の時代において「スピン」と呼ばれるかもしれない。「スピン」とは、さまざまな形のメディアを通じたコントロールと支配の形以外の何ものでもない。伝説的な welfare queen のイメージを分析すると、作動中の「スピン」を見ることができる。急進的右派政治家の道徳観がある枠組みを構築し、それを通して、われわれは政治家と同じようにその世界を見ることになる。人種差別的、性差別的含みを思い起こさせる、道徳的にも性的にも墮落した、真面目に働いて税金を払っている人の金を盗んでいるという「悪い母親」のイメージが作られたのは、アメリカ人がそのイメージを受け入れることを確かなものにするためであった。そしておそらく

もっと重要なこととして、人々がそのイメージによって怒りに燃え上がって行動する、つまり、レーガンや他の保守政治家に投票することに狙いがあった。

しかしながら、両方とも、そのイメージのフィクションとしての要素は、もっと重要であった隠された政治的課題を支えるために、その体裁を整えられていた。すなわち1) “Migrant Mother”の写真は、企業利益に対する公共の利益の優先を図る政府の事業規制を通して、ニューディールとリベラルイデオロギーの支持を象徴した。そして2) “Welfare Mother”のイメージは、福祉プログラムの廃止と「自由市場」あるいは自由放任資本主義への回帰を通じて、リベラルイデオロギーとニューディールの否定を象徴した。そこでは公共の利益から離れた政府によって企業利益が守られ、促進された。それゆえ、50年も離れて位置づけられた二つのイメージは関連がないように思われるかもしれないが、実のところ、いわゆるコインの裏表を表している。さらに、両方とも、イデオロギー戦略の一部であったのであり、アメリカの人々の間の深い道徳観に入り込んで共鳴を与えるメッセージを伝えながら、それぞれの時代の政治的言説を強力に形作ったのである。

3. 結 論

Migrant mother と welfare queen の分析を通して、われわれはジェンダー神話、階級バイアス、人種差別主義に気づき、それを裸にし、政治的な操作のむきだしの骨格やイデオロギー戦争を行うためのイメージの利用を明らかにした。これらの例を詳しく調べることで、イメージに隠されたメッセージは明らかにされ、われわれはある事実、つまり貧困についての理解や認識は本質的・内的に政治的な性質を持つということに気がつく。このような分析は、われわれはいまだに同じ闘いを続けている、しかし変化している歴史的な文脈のなかの異なったイデオロギー的な領域においてである、という認識をもたらす。

このように、貧困についての知識が政治的な力

として利用されるのは明らかである (O'Conner 2001: 291-295)。しかしながら、政治的アーリーナにおける言説戦争において、この知識を構築し、それを利用に移すためには、われわれはまず普通の人びとが貧困をどう捉えているか、どんな人を貧困だと考えているか、貧困の原因を何だと考えているかということを理解する必要がある。まず調査を通してこれらのデータを集め、貧困の知識について分析した後、これらの情報を利用し、イデオロギーの闘いに確かに参加し、効果的な共同闘争をするだけの準備ができるだろう。進歩主義者にとってのイデオロギー戦争の目的は、歴史的にずっとそして今も、「貧困問題」についての焦点を個人的なものから根源的な原因へ、そして貧困と不平等を容認しているシステムへと移すことにある。この論文にはっきりと示されているように、望ましい目標は、効果的な操作とともに言語やシンボルやイメージがどのように政治的目的を達成するために強力なツールとして用いられているか、これらを理解することによってもたらされる。

注

- 1) この原文は、Deborah McDowell Aoki (2005) *Perceptions of Poverty: Symbols in the Eye of the Political Economy*, *Journal of Education and Social Work*, No.11、である。
- 2) 例として、OECDの2004年のレポートでは、日本の新たな二重システム、つまり正規社員と非正規社員、短期の契約社員、臨時社員の二重システムが、格差拡大の構造的な原因として挙げられている。学生と主婦を除いた14歳から34歳の推計400万人とされるフリーター層の増加がこの一員となっている。フリーターという言葉は英語のフリーとドイツ語のアルバイター、すなわちワーカーを合わせた造語である。「アルバイト」は日本では通常、パートタイムで不安定・低賃金の仕事を指す。日本の競争の激しい労働市場では、高卒の若者は食物連鎖の最下層に位置づけられていて、多くは会社からの教育や訓練を受けられない、使い捨ての労働者として扱わ

れている。かつてない二重構造の拡大が、短期雇用の経験があり、低学歴で、ほとんど人的資本を持たないような若者の間に集中し、スキルのない「流浪」の労働者層を作り出している。日本の新たな搾取的な企業文化による意図的な操作によって、フリーターのイメージは、低賃金・低スキルの労働者というより、自由な労働者というものにされている。

3) Dorothea Lange, "The Assignment I'll Never Forget: Migrant Mother," in *Popular Photography Magazine*, February 1960

4) *Democrat and Chronicle Newspaper*, August 25, 1983

5) しかしながら、このプログラムは、なおスティグマ化された福祉援助を貧困層に与え、そのことによって彼らをスティグマ化されていない援助や社会保障プログラムから遠ざけている。

6) トンプソンは、この写真が伝えているような、無力の象徴的存在では全くない。彼女は会社の労働争議に積極的に関わり、組織のまとめ役として働いていた。自分が典型的な例として受け止められてしまったことで、彼女はランゲに写真をとらせたのを後悔した。

7) のちに George H. W. Bush は 500 億ドルの税金を使って Savings and Loan 社を救済することとなった。

文献

- Berger, P. L. & Luckmann, T. (1966). *The Social Construction of Reality*. New York: Anchor Press. (1977、山口節郎訳『現実の社会的構成 知識社会学論考』新曜社)
- Crossley, N. (1996). *Intersubjectivity: The Fabric of Social Becoming*. London: Sage Publications.
- Farm Security Administration Collection: An Overview "Dorothea Lange's 'Migrant Mother' Photographs." {On-line. Available: http://lcweb.loc.gov/rr/print/list/128_migm.html}.
- Frank, T. (2004). *What's the Matter with Kansas?* New York: Metropolitan Books.
- Gal, S. (2001). Language, gender, and Power: An Anthropological Review. In A. Duranti (ed.), *Linguistic Anthropology*. Malden: Blackwell Publishing.
- Harrington, M. (1984). *The New American Poverty*. New York: Rinehart & Winston.
- Lakoff, G. (2004). *Don't think of an elephant: Know your values and flame the debate*. White River: Chelsea Green Publishing.
- Maskovsky, J. (2001). Afterword: Beyond the Privatist Consensus. In J. Goode and J. Maskovsky (eds.) *The New Poverty Studies: The Ethnography of Power, Politics, and Impoverished People in the United States*. NY: New York University Press, pp.470-482.
- Mullins, L. (2001). Households Headed by Women: The Politics of Class, Race, and Gender. In J. Goode and J. Maskovsky (eds.), *The New Poverty Studies: The Ethnography of Power, Politics, and Impoverished People in the United States*. N. Y.: New York University Press, pp.37-56.
- O' Connor, A. (2001). *Poverty Knowledge: Social Science, Social Policy, and the Poor in Twentieth Century U. S. History*. Princeton: Princeton University Press.
- Piven, F. F. (2001). Welfare Reform and the Economic and Cultural Reconstruction of Low Wage Labor Markets. In J. Goode and L. Maskovsky (eds.), *The New Poverty Studies: The Ethnography of Power, Politics, and Impoverished People in the United States*. N. Y.: New York University Press, pp.135-151.
- Phillips, K. (2002). *Wealth and Democracy: A Political History of the American Rich*. New York: Broadway Books.
- Sapir, E. (1929). The Status of Linguistics as a Science. In *Language* 5, No.4, (December), pp.207-214.
- Whorf, B. (1941). The Relation of Habitual Thought and Behavior to Language. In L. Spier(ed.), *Language, Culture and Personality: Essays in Memory*

of Edward Sapir. Menasha, Wisc.: Sapir Memorial Publication Fund, pp75-93.

(北海道大学大学院教育学研究院・研究生)

(北海道大学大学院教育学研究院・教授)